

「汚れときよめ」

マルコの福音書 7:1~8

はじめに

私たちの毎日の生活の中で最もよく洗うもの、それは「手」ではないでしょうか。それが汚れた時はもちろんのこと、帰宅時、食事を作る、食べる前、トイレの後など、個人差はありますが、水に恵まれた私たち日本人は本当によく手を洗います。今日の箇所はそんな「手」を洗うことに関する出来事です。しかしその「手」を洗うという行為そのものの重要性、事のよし悪しを述べるつもりはありません。ここに記された出来事に表されている、いや隠されている神のご計画だけに目を留めていただきたいのです。聖書は私たちの今の毎日の生活をより良いものにしていくための教科書ではありません。神が何を成し、そして何を成そうとしておられるのかが記された、神の計画書です。そのような視点で今日も聖書と向き合ってみましょう。

1. 汚れた手でパンを食べる

【新改訳 2017】 マルコの福音書

7:1 さて、パリサイ人たちと、エルサレムから来た何人かの律法学者たちが、イエスのもとに集まった。

7:2 彼らは、イエスの弟子のうちのある者たちが、汚れた手で、すなわち、洗っていない手でパンを食べているのを見た。

当時の「**パリサイ人をはじめユダヤ人はみな**」手をよく洗ってからパンを食べる、食事をしていたことが記されています。そしてそれは「**昔の人たちの言い伝え**」によるものであると後述にあります。しかしここでイエシュアの弟子たちは、彼らもまた同じユダヤ人でありながら「**汚れた手で、すなわち、洗っていない手でパンを食べて**」います。この出来事におけるイエシュアの意図しておられることは、「**昔の人たちの言い伝え**」が、人を「**神の戒め**」から引き離している、悪いものであるということを示し、イエシュアは弟子たちにこのようなことをさせたと考えられます。しかしこの出来事もまた神のご計画の視点で見ると、また違った意味を導き出すこともできます。それは弟子たちが「**汚れた手で…パンを食べた**」という出来事に、神のご計画を指し示す、ある一つの「型」が表されていると考えられるからです。ここで使われている「汚れる」という意味のヘブル語はターマー(אָמַץ)と言い、その最初の言及は創世記 34:5 の出来事です。

【新改訳 2017】 創世記

34:1 レアがヤコブに産んだ娘ディナは、その土地の娘たちを訪ねようと出かけて行った。

34:2 すると、その土地の族長であるヒビ人ハモルの子シェケムが彼女を見て、これを捕らえ、これと寝て辱めた。

34:3 彼はヤコブの娘ディナに心を奪われ、この若い娘を愛し、彼女に優しく語りかけた。

34:4 シェケムは父のハモルに言った。「この娘を私の妻にしてください。」

34:5 ヤコブは、シェケムが自分の娘ディナを汚したことを聞いた。息子たちは、そのとき、家畜を連れて野にいた。それでヤコブは、彼らが帰って来るまで黙っていた。

ヤコブ（すなわちイスラエル）の娘ディナを、ヒビ人つまり異邦人が捕らえ、「汚した」辱めた、強姦したという出来事が、聖書で最初のターメーが使われた箇所です。ですからターメーとは本来、洗えばきれいになるような汚れを指すのではなく、民族的な汚れ、イスラエルの血筋に、異邦人の血が混ざる、雑婚といわれる状態を指すと言えます。ヒビ人シェケムがしたことは、この世の倫理観で見れば当然犯罪行為ですが、彼はその直後にこのディナを「愛し、彼女に優しく語りかけ」、そして正式に結婚を申し込み、ついには自分も自分の一族ごと彼女と同じイスラエル人になろうとし、その証しである割礼まで受けています。ですから、見方を変えればこの出来事は、汚した、汚されたというようなものではなく、イスラエルの民に異邦人が結びつく、一つの民になるということであり、神のご計画にも非常に則した内容であると言えるのです。なぜなら神のご計画の完成である「神の国」とは、イエシュアによってイスラエルと異邦人の教会が一つになって治める国であり、イスラエルによって、イスラエルを通して、繋がることによって祝福される世界だからです。ですから「汚れた」と訳されたターメーですが、なんと本来は「神の国」を指し示すような言葉であると言えるのです。私たちは普通この「汚れる」という言葉には悪いイメージしか持ちません。しかし神はこのように、私たちとは全く異なった考え、視点を持っておられるのです。まさにこう記されているとおりです。

【新改訳 2017】イザヤ書

55:8 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。
——【主】のことば——

このように、神の御言葉は私たちの常識や概念で理解することはできないのです。

また弟子たちはその汚れた手で「パンを食べ」たとあります。この「パンを食べる」という行為、表現が聖書で最初に使われたのが創世記 3:19 です。

【新改訳 2017】創世記

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

これはエデンの園で罪を犯したアダムに語られた御言葉です。口語訳聖書では同様の訳で「パンを食べる」となっていますが、この新改訳では「糧を得」と訳されています。そしてこの言葉は前節の「野の草を食べる」、そして「食を得る」ことが言い換えられ、強調されたものとして記されています。そして

これらの表現はいずれも「苦しんで」、「茨とあざみ」そして「顔に汗を流して」という、苦痛や困難、労苦と対になって記されています。ですから「パンを食べる」こととは本来、決して嬉しい、楽しいものではなく、むしろ真逆の意味を持った行為、言葉であると考えられます。そしてその苦しみは、このアダムのように、神のご命令に聞き従わず、神以外のものの声に聞き従ってしまうという罪によるものです。ここでみなさんに二つお尋ねします。①みなさんはいつも神のご命令だけに従って生きておられますか？「はい」と答えられる方はいないと思います。では②神に聞き従わず、神以外のものに従っていることに心が痛んだり、悩んだり落ち込んだりすることはありませんか？これに「はい」と答えられた方、あなたは神に選ばれています。イスラエルに繋がる教会の一員です。なぜなら私たちは、神の前に自分が罪人であることを認め、その結果、その罪がイエシュアの十字架の死によって赦されたことを信じる者の集まりだからです。罪責感という感情は誰にでもあります。しかし、自分が神に対して罪を犯している、神の前に罪人であると感じている人は多くありません。私たちは神を信じているがゆえに、神に聞き従うことこそが正しいと考えているがゆえに、それができていない、できていないどころかむしろ逆にしてはならないことをしてしまう、言ってはならないことを言ってしまう、そんな自分の罪深さに苦しめられています。あの使徒パウロもこう言っています。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙

7:18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。

7:19 私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。

7:20 私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。

7:21 そういうわけで、善を行いたいと願っている、その私に悪が存在するという原理を、私は見出します。

7:22 私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいます、

7:23 私のからだには異なる律法があって、それが私の心の律法に対して戦いを挑み、私を、からだにある罪の律法のうちにとりこにしていることが分かるのです。

7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

このように、パウロも大いに苦しんでいます。それは神に従いたい、従わなければならないと思う思いがあるゆえです。これが、この罪の苦しみこそが、私たちがイスラエルとともに「神の国」に入る教会として選ばれた証しです。使徒ヨハネもこう記しています。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録

1:9 私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり…。

「イエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者」それが今日の私たち教会の姿です。そしてその事実が「汚れた手で、すなわち、洗っていない手でパンを食べている」イエシュアの弟子たちの中に「型」として表されていると考えられます。そんな弟子たちの対極的な存在として記されているパリサイ人、律法学者たちの姿は「型」と呼ぶ必要のないほどに明確に記されたイスラエルの民、ユダヤ人たちの姿です。

2. きよめる

【新改訳 2017】 マルコの福音書

7:3 パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わずに食事をするとはなく、

7:4 市場から戻ったときは、からだをきよめてからでないで食べることをしなかった。ほかに、杯、水差し、銅器や寝台を洗いきよめることなど、受け継いで堅く守っていることが、たくさんあったのである。

7:5 パリサイ人たちと律法学者たちはイエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えによって歩まず、汚れた手でパンを食べるのですか。」

パリサイ人と律法学者のような指導者をはじめとして、イスラエルの民、ユダヤ人が「きよめる」ことに徹底している姿が記されています。しかしこの言葉もまた本来、私たちが持っている概念とは大きく異なるものです。ヘブル語でターヴァル(טָוַר)という言葉が使われているのですが、この言葉は本来、このような意味で用いられました。

【新改訳 2017】 創世記

37:28 そのとき、ミディアン人の商人たちが通りかかった。それで兄弟たちはヨセフを穴から引き上げ、銀二十枚でヨセフをイシュマエル人に売った。イシュマエル人はヨセフをエジプトへ連れて行った。

37:31 彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎを屠って、長服をその血に浸した。

37:32 そして、そのあや織りの長服を父のところへ送り届けて、言った。「これを見つけました。あなたの子の長服かどうか、お調べください。」

37:33 父はそれを調べて言った。「わが子の長服だ。悪い獣が食い殺したのだ。ヨセフは確かに、かみ裂かれたのだ。」

これはヤコブ(すなわちイスラエル)の子ヨセフが、兄たちによって奴隷として売り飛ばされるという出来事です。ヨセフの兄たちは彼が残して行った服を雄やぎの「血に浸した。」とあり、ここに聖書で最初のターヴァルがあります。このように、「きよめる」と訳されたターヴァルですが、本来は全く逆の意味で「血にまみれる、血で汚す」というような意味があり、死を指し示すような言葉でさえあることがわかります。またヨセフがエジプトに連れて行かれるという、奴隷、捕囚という事実とも結びついており、このターヴァルには、イスラエルの民の歩み、歴史的な全存在が表されていると言えるのです。すなわち彼らイスラエルはかつてエジプトの奴隷でした。また彼らは動物を屠り、その血を注ぎ出して神を礼拝しま

した。またある時は内外で多くの戦いを経験し、多くの血を流してきました。そしてまたバビロン、ギリシャ、ペルシャ、ローマなど多くの国々の奴隷となりました。ですからこの「きよめる」ことにこだわるユダヤ人たちの姿には、彼らの歴史的に大きな局面と今日までに至るその存在が象徴的に表されていると考えられます。そんな彼らイスラエルの民、ユダヤ人たちに対して、イエシュアは彼らを「偽善者」と呼び、イザヤの預言を引用してこう言われました。

3. イザヤの預言

【新改訳 2017】マルコの福音書

7:6 イエスは彼らに言われた。「イザヤは、あなたがた偽善者について見事に預言し、こう書いています。『この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。』

7:7 彼らがわたしを礼拝しても、むなしい。人間の命令を、教えとして教えるのだから。』

7:8 あなたがたは神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っているのです。」

一見すると非常に厳しい言葉、痛烈な批判です。この部分だけを聞けば、神とその御言葉に従っていると思いついでいるユダヤ人たちは、激しく怒るか悲しむかのどちらかです。しかしこの引用元であるイザヤ書 29 章を見れば、これが彼らに対する単なる叱責、批判ではないことがわかります。

【新改訳 2017】イザヤ書

29:13 主は言われた。「それは、この民が口先でわたしに近づき、唇でわたしを敬いながら、その心がわたしから遠く離れているからだ。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことである。」

29:14 それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び、不思議なこと、驚くべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」

29:15 わざわいだ。【主】に自分のはかりごとを深く隠す者たち。彼らは闇の中で事を行い、そして言う。「だれが私たちを見ているだろう。だれが私たちを知っているだろう」と。

29:16 ああ、あなたがたは物を逆さに考えている。陶器師を粘土と同じに見なしてよいだろうか。造られた者がそれを造った者に「彼は私を造らなかった」と言い、陶器が陶器師に「彼にはわかまえない」と言えるだろうか。

29:17 もうしばらくすれば、確かに、レバノンは果樹園に変わり、果樹園は森に見えるようになる。

29:18 その日、耳の聞こえない人が、書物のことばを聞き、目の見えない人の目が、暗黒と闇から物を見る。

29:19 柔和な者は【主】によってますます喜び、貧しい者はイスラエルの聖なる方によって楽しむ。

29:20 横暴な者はいなくなり、嘲る者は絶え果て、よこしまなことを企む者はみな絶ち滅ぼされるからだ。

29:21 彼らはことばで他人を罪に陥れ、城門で戒めを与える者に罾を仕掛け、正しい人を、理由もなく押しつける。

29:22 それゆえ、アブラハムを贖い出された【主】は、ヤコブの家についてこう言われる。「今からヤコブは恥を見ることなく、今から顔が青ざめることはない。」

29:23 彼が自分の子らを見て、自分たちの中にわたしの手のわざを見ると、彼らはわたしの名を聖とし、ヤコブの聖なる者を聖として、イスラエルの神を恐れるからだ。

イスラエルの民が「偽善者」となっているのは、「29:14 それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び、不思議なこと、驚くべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」という御言葉のゆえです。彼らは神によってこのようにされたのです。しかしやがてその状況も変わることで、つまりイスラエルの民の目が開かれることが「29:17 もうしばらくすれば、確かに、レバノンには果樹園に変わり、果樹園は森に見えるようになる。29:18 その日、耳の聞こえない人が、書物のことばを聞き、目の見えない人の目が、暗黒と闇から物を見る。」と、このように預言され、ついには「29:22 それゆえ、アブラハムを贖い出された【主】は、ヤコブの家についてこう言われる。「今からヤコブは恥を見ることなく、今から顔が青ざめることはない。29:23 彼が自分の子らを見て、自分たちの中にわたしの手のわざを見ると、彼らはわたしの名を聖とし、ヤコブの聖なる者を聖として、イスラエルの神を恐れるからだ。」という「ヤコブの家」すなわちイスラエルの回復、すなわち神のご計画の完成である「神の国」における彼らの真の姿がはっきりと記され、必ずそのようになることが約束されているのです。ですからイエシュアの彼らに対するこの御言葉は、決して批判などではなく、むしろ逆に福音と言うべき神の約束の御言葉であったということです。

4. 神の御心と私たちの信仰

このように、今日の出来事には、「罪に苦しむ教会」と、「盲目なイスラエル」という神のご計画における二つの存在の、この世における状態、状況が表されており、そしてそれらに対する神の約束、「神の国」の福音が指し示されているということを述べました。そしてその福音とは「ヤコブの家」すなわちアブラハム、イサク、イスラエルの子孫に対するものであることが表されていました。つまり私たち教会は、このイスラエルに結びつけられることによってのみ、神の福音に与り、その祝福の中に入る、いわゆる救われるということです。私たちの神はアブラハム、イサク、ヤコブの神、イスラエルの神と呼ばれる御方であり、イエシュアはユダヤ人の王として来られた御方であることを覚えなければなりません。

しかし神のご計画は、このユダヤ人たちの優れた知恵や知識によるものでもなく、また私たち教会の数やその働きによるものでもなく、ただ父なる神の御言葉、御子イエシュアの御業によって成し遂げられるものなのです。ですからそのためには、むしろユダヤ人たちは自分たちの待ち望んでいた王なるメシアを十字架にかけて殺すほどに盲目に、愚かにならねばならず、また教会も自分たちの力では決して世界を変えることも、自分自身を変えることさえもできない事実で失望し、イエシュアの再臨を待ち望むようにならなければならないのです。

そして神のご計画はすべて、聖書に記された通りに起こり、聖書に記されたすべてのことが必ず成就するのです。最後にもう一度言います。聖書は神の計画書です。そのご計画を知ることが神の御心を知ることであり、そしてそれを信じて受け入れ、その成就を待ち望みつつ生きることが、私たちの持つべき神に対する信仰です。これからも神の御心を求め、信仰が与えられるように祈り求めてまいりましょう。